

【学位論文審査の要旨】

作業同一性とは、自分が何者であり、将来、どのようでありたいのかという認識である。本論文は、高齢者の主観的なライフコースを計画に取り込むために、その作業同一性に関する情報を評価する、介護を要する地域在住高齢者を対象とした作業同一性質問紙（以下、OIQ）の開発を目的とした研究である。その研究デザインは、健康関連尺度の選択に関する合意に基づく指針である COSMIN (COnsensus-based Standards for the selection of health Measurement INstruments) に準拠して適切に組み立てられており、副論文1では高齢者の作業同一性に特化した質問項目を得るために、先行研究で得られた地域在住要支援・要介護高齢者の作業同一性の概念をもとに質問項目を作成し、3回にわたるデルファイ法を用いて、内容妥当性の検討が行われた。主論文では、これらの質問項目の構造的妥当性、基準関連妥当性、内的一貫性を検討し、信頼性と妥当性のある3因子14項目からなるOIQを作成した。副論文2では、このOIQの臨床上的有用性を検討するために3名の対象者にOIQの評価結果を用いた介入を行い、対象者の作業同一性、作業参加、日常生活活動、手段的日常生活活動、および、健康関連 QOL の維持や改善に、おおむね良好な影響を及ぼしたと考えられた。

開発した質問紙は、地域在住要支援・要介護高齢者の作業同一性をいわゆる「自分らしい生活」の疫学的研究において扱う可能性を高める一方、作業療法実践場面の対象者の過去、現在、将来における作業同一性の認識を理解する有用なツールとなることが期待され、本論文は、作業療法に貢献しうる研究であると高く評価することができた。

最終試験においては、OIQの基準関連妥当性について既存の評価との関連性が高くなかった点、作業同一性の概念と質問項目の関係、作業療法実践場面での活用方法といったことについて質問があったが、既存の評価が対象年齢を限定していないことに比べてOIQは地域在住要支援・要介護高齢者に限定した質問紙であることから、評価している作業同一性の内容・性質に差異がある可能性があること、「現在」の作業同一性の状態を項目文で表現する際の認識の違いから作業同一性概念の理解を今後さらに進めていく必要があること、OIQは自己記入式という点では既存の評価より簡便であるが、作業療法実践場面の活用ではある程度時間をかけて面接し、対象者の語りを引き出して使用するものであったことに言及するなど、質問者に対して適切にかつ誠実に応答し、さらなる研究の着想、広がりについても述べるなど、今後の研究に対する意欲も認められた。

以上のことから、本論文を博士論文に値し、著者が博士(作業療法学)の学位に相当するものと認める。